

ガブリエル サイード 非生産的發展 (1)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学教養論集刊行会 公開日: 2016-08-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 高橋, 早代 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/18023

非生産的発展¹⁾ — 1

ガブリエル・サイード 著
高橋 早代 訳

発展がわれわれに約束した地上の楽園が到来することは決してない。大多数の住民たちは煉獄や地獄の辺土に暮らし、より良い暮らし向きから外れたところで、意に反した結果に臍をかんでいるのだ。

誰も発展を止めることはできないだろう。何百、何千年も続いて来たのだ。発展にかける盲目的な意志も同様で、その営みは何世紀にもわたっている。知らず知らずのうちに、もしくは望まずして、われわれ自身がその実践者であり、足跡は地球全体に及んでいる。われわれにできるのは自己批判だけだ。発展の軌道をより盲目的でない形に戻し、その結果に向き合いながら進めて行かねばならない。盲目的発展を凌駕する自己批判的発展、それこそが焦眉の急である。

本書に見いだされる発展の諸相は、メキシコの自己批判に端を発しているが、現象は普遍的なものだ。近代産業部門は国が違えば局面も違ってくるが、世界の大都市は奥地の集落よりも互に似通っている。それは（善きにつけ悪しきにつけ）発展の文化を旗印に掲げて、あらゆる伝統文化を踏みしだいていった。そして知力、権力、財力、特権は大卒生たちが率いる上意下達のピラミッド型²⁾の中央集権諸機関を通して大都市に集中してきた。こうした繁栄は高等教育、上級組織、壮大な解答への盲目的な信仰を後押しして、世界的かつ国別の発展を2つの非生産的両極に分化していく。即ち（高額投資先の）ピラミッド型産業部門の低生産性と、伝統産業部門の（1人当たりの）低生

産性である。要は湯水のごとき浪費に採算性があるかどうかだ。なぜなら経済学的に見た場合、(1人当たり、1ヘクタール当り、1企業・1機関当りの)資本集中は投下資本の生産性を最も低く抑えるからだ。また政治的視点に立つならば、集中投下資本はその牽引者たちを潤し、机上の資本蓄積は、一見、全員に手の届く合法的な利益の感がある。そして社会学的にだが、発展の幻想は、その信奉者たちに幻想とは映らない。こうして高いものにつく発展幻想が横行し、低価格で全体の利益となる生産性と福祉の向上のための政策は抑え込まれていく。

近代化が進行する国で失敗するのは、需要ではなく供給である。理由は、なにはさておき、高くつきすぎるものが供給されるからだ。それがあまりに高額なため政治手段(無料もしくは公的補助の形)で決定を下すことができず、この目的のために(現金のバラマキの代わりに)増税を打ち出せば不平等を助長するだけだろう。なぜなら、高価なものは全体には行き渡らないからだ。(医療・教育・治安など)個人向けの供給、アカデミックな称号、奨学金付雇用、自動車、高速道路、優れた労働環境(消費については言うまでもない)など高くつくばかりで生産性の乏しいあらゆる発展の中で、近代産業によって声高に主張される需要が普遍化されることは決してない。

貧しい市場の必需品を充足させるためには、食欲に走るのではなく、基盤的なものから着手しなければならない。そして自己満足に陥ることなく、安価な生産手段を供給すべきである。国家も、企業や労働組合員³⁾、そして大学関係者たちの巨大ピラミッドも、往々にして近視眼的利益、もしくは信仰からか、所属分野の発展が全体の発展につながると信じがちである。彼らは脆弱な経済基盤を支援していくのは不可能か、自分の埒外の仕事でもあるかのように嘆くばかりだ。貧しい人々の食糧、衣類、持ち家などのために新旧を問わず効果的な手段を講じること。それは地方の住民が自活していく(トウモロコシの売買やメイドの仕事よりも格段に生産性のある)場を設けることになるだろう。そのために国庫の歳入の一部を現金で分配する、あるいはは

全般的に、貧しい市場に妥当な支援金を投入することも一考に値するはずだ。

本書は一試論、即ち日常的な体験をふまえ、提示できる限りの数字、そして数多の執筆者たちの意見を考慮し、相互に無理なく符合する総体的な仮説である。以下、3部に分けて叙述していく。

1. 「個人向け消費の限界」：各国共通の発展的供給コストの一般的な限界を示す。
2. 「国内市場に欠如しているもの」：特に貧しい国とその市場に普遍化可能な発展的供給の概念に言及する。
3. 「現金での分配」：大学生（特に権力志向の強いメキシコ人学生）が現金での分配の代わりに何故に不可能な発展政策の側に立つかを論じる。

概論では市場外（自己消費のための生産）と大小を問わず市場内の発展について考察するが、税金・官民共同・従属・公的支援と引き換えに提供される政治的市場（生産品とサービス、利権と干渉、雇用）にも言及する。また以下の非生産的な特殊利益市場についても同様に扱っていく。即ち、（特殊で隷属的な）個人向け市場、（固有の消費と独立した供給、もしくは従属的労働のための）生産手段としての市場、（他者の生産手段に依存する）従属労働市場、そして善意に基づく市場（互惠、賛助、フェアトレード）である。しかし、ここでは、自由もしくは政治主導の市場内外の取引（自己資本によるものであれ、大小を問わず公的もしくは民間資本であれ）に優劣をつけようとするものではない。要は想定した改善がすべての人々に実現・持続可能なものであるためには、いかなる事例が、どのような方法で行われるべきかであるからだ。

概論⁴⁾

個人向け消費の限界

近代化は個人向け市場にアンバランス、つまり需要の増大と供給の減少を生み出すことになった。

- a) 人口増加による需要の増大。1人の人間が人間らしく暮らすためには他者による対応が必要となる。
- b) 個人的需要の増加。人類の発展の結果、限られた人々のためだけではなく全体として個別の対応がふさわしいという考え方が生まれる。
- c) 物質的生産の増大。そのため以前は自由で個人的なものだった持ち時間が奪われることになる。時間をかけずに同じものを生産し、自由時間を確保することで生産性を上げるのではなく、生産物をより安価に、より魅力的にしていくために、結果的により多くの時間が費やされていく。

しかし、個人向け消費は経済規模に欠けている。それを広く分配、もしくは機械化した場合、個人向け消費の意味は失われていく。結果、安価な大量生産品に対し、個人向け物品のコストは次第に上昇し、供給量は減少することになる。

個人向け消費では高価な特殊品は言うに及ばず、限定的数量を希望者全体に供給することは不可能である。人は消費することはできても、時間当たり以上の個数は生産できないからだ。以上により個人向け消費の限界は明らかで、同時に「多くのものを、瞬時にして、より没個性的な形で」に対する近代社会特有の不満も説明される。それに対する解決法は、(a)購買欲に歯止めをかけ、(b)個人向け消費を抑え、(c)“もの”に拘泥しない生活を受け入れるしかない。

これは移行期にある社会の場合、移民するまでもないが必需品のみでよしとする地方の質素な暮らし、かたや大都市では、空気・空間・時間の恩恵を享受するに留まる生活となろう。

国内市場に欠如しているもの

しかしながら移行期には次のような多数者が出現することがある。物質面ではまだ貧しく、とりたてて個人向け消費を求めはしないものの旺盛な購買欲を持つ人々である。その発展的モデルは物質的に恵まれた少数者で、彼らは個人向け消費に貪欲で、収集嗜好も併せ持っている。このモデルは外国からの移住者たちだと言われているが、そうではない。つまり個人向け消費に熱心で身边を物で溢れさせる裕福なアジア系移民やクリオーリョは、近代社会の特質でもなければ持続的に普遍化できるモデルでもない。

以上により上記のモデルを満足させる十分な国内市場は存在しないと言えるだろう。存在するはずがないのだ。なぜなら国内市場に不可欠なものは一義的に有効需要ではないからだ。有効需要による国内市場の形成には金も雇用も、さらには機械化以前の低生産性の技術すら欠如している。その技術はさらに多くの金と有効需要を生むかもしれないが、供給モデルは一般化できる産物ではない。これでは問題提起が逆である。国内市場が必要としているのは貧しい市場向けの適切な供給であって、そのためには必需品の供給を持続可能な形から現実的に始めることだ。(メキシコのように) 高等教育を全国民に無償で提供するなどは、衣も食も事欠く人間にとって凡そ非現実的かつ無意味で、結局はポピュリズムに陥るばかりだ。意味があるのは生産手段(時期ものの良質な種、牽引力のある家畜、安い肥料、織り機やミシンなど)で、それがあれば貧しい農民たちは僅かでも経済規模を持つ固有の産物を得ることができるし、低価格でも農産物の供給が可能となる。ただし、適正規模での生産計画が不可欠で、自力での支払いが可能であること。つまり特殊なサービスを必要とせず、教育費も維持費もかからないもの、底辺の住民た

ちが do it yourself 可能なものでなくてはならない。

ここで生産単価と生産量を単純化して次の4類型を想定してみよう。

- 1型：低コスト—少量生産
- 2型：低コスト—大量生産
- 3型：高コスト—大量生産
- 4型：高コスト—少量生産

近代化のパラダイムは1型から3型への段階的移行である。しかしながら現実には、成功している家族・企業体・地域・産業部門・国の場合、1型を素通りしている。つまり低コストで量産する2型で生産性を上げていくが、そのやり方は供給促進者側から育成上不適切と判断されても採算性があつたし、今後も同様のはずだ。そして、この跳び越してより大きい新たな投資が捻出可能となり、さらに生産性の上がる3型や4型の奢侈品の操業に繋がっていく。では2型の供給により何がかわるか。市場に産物が出回り、その生産部門や産出国は剰余分を持つことになる。そして非生産者側は、その産物を生産することなく1型から3型へ移行しようとする。現実問題として、財政が許す限り、非生産的発展が普及しないまま4型への移行もよくあることだ。こうして生産的分野と非生産的分野を併せ持つ近代産業部門が出現することになるが、3型・4型は常にコストが高くなり1型で暮らす住民には普及しない。理由は、1型から4型への段階的移行では生産量は経費以下に抑えられるため、また1型から3型への場合には生産量が経費を上回っても、剰余分は移行の過程で吸収され、出回らなくなるからだ。

結果：国内の近代産業部門とその他の部門間の交換（一般に想起されるような農産物と工業製品の交換ではない。それは近代産業部門内で行われている）は特に非生産性の顕著な三次産業の交換となる。つまり相対的に安価で生産性の低い個人向け従属的サービス（1型）と引き換えに行われる高コス

ト・低生産性個人向け近代的サービス（4型）の場合である。「相対的に」と述べたのは、第一に貧しい人々にとって交換は不利に働き、非生産的労働を余儀なくさせられるため、彼らは僅かな賃金しか受け取ることができないこと。次に、連帯することでピラミッド型産業に合体し、商機をつかんで近代化を成し遂げるケースもあるからだ。後者は低生産性ながら明らかに高コストの4型と同様のピラミッド型就労の提供者たちである。逆説的に言えば、（すべての人々にとって時間は等価であるべきとする）平等主義の基準に照らし合わせて不平等を改善するために雇用を創出し、非生産的交換を維持することがいかに矛盾に満ちたものであるか一目瞭然だ。採算性を上げるために不平等を求める一つの発展的プロセスを見てみよう。（医者・公務員・組合の指導者たち・大学の研究者たちなど）高額所得者のメイドや運転手、庭師たちが雇用主と同額を稼ぐようになったら、彼らは間違いなく職を失うはずだ。高額サービスと低額サービスを交換することは、特権部門の消費を増大させるだろうが、全体の生産性と消費の増大にはつながらない。

雇用の促進を目標に掲げるなど笑止である。真の目標は必需品に対する満足度を高めることで、すべての人々の生活必需品から着手していかなければならない。市場の内外を問わず、それが雇用であろうと、他の活動（まっとうに暮し、賢く消費する。自家用に生産するなど）であろうと、その中から生み出されて行かねばならない。雇用だけが消費を向上させるというのはまやかして、生産の分化、労働の営利的分配、そして労働市場のピラミッド化が常に消費の最終コストを小さくするとは限らない。生産コストを実際以上に高騰させる分化・交換・ピラミッド化があるのだ。残念ながら近代産業部門にも文化的制約が立ちほだかり、次のような見方を妨げている。つまり乏しい資産ではあっても農民自身が地方の企業主として低コストの生産物を介して近代産業部門で不完全就業資本を部分的により良く利用できる潜在的な顧客となりうる可能性である。現状では農民たちは近代文化から疎外された存在で、潜在的な従属労働者もしくは手間のかかる不完全就業者としか見なされ

ていない。

貧しい人々が2型で自給自足できるように供給量をふやせば全体的な満足度を上げることになるかもしれない。ただし、近代産業部門が（所有物として、雇用として、利権として）有している食糧生産手段を彼らに提供するのには非現実的であろう。なぜなら、首尾よく行った場合は過剰生産、そうでなければ競争力を失い、彼らを市場での失敗に追いやることになるからだ。次第に必要量を減じていく繁栄社会に増加の一途をたどる生産者を合体させるのは不可能である。辺境の農民たちにとって実現可能な豊かさとは、大部分が市場外で行われる消費の増加であり、雇用など無関係である。彼らは自分たちの食糧を生産し、市場価格の大部分を占める中間コストを節約する。つまり2型の家庭用生産物市場を有利にもっていこうとするわけだ。支払いに際してはトウモロコシを温存させ、（トウモロコシとは違って）近代産業部門で競合できる織物や素朴な手工業品が用いられる。地方に点在する集落を単位としてトウモロコシを生産し、そのささやかな収穫を商業ベースに乗せるのは採算がとれても、織物の「収穫」ではそうはいかないからだ。

トウモロコシ（その他の低生産の一次産品を合わせて）も個人向け消費（他の非機械的サービス業を合わせて）も近代産業部門と素朴な商品部門間の交換には不適切である——例外は織物と若干の食糧など二次的生産物——。トウモロコシは傷みやすく、個人向け消費（専門家の地方出張費やメイドを都市に送り込む場合も含めて）は流通コストが高むからである。

適切な供給は国内流通市場の欠陥を、その綻びから破っていくことになるだろう。流通の不足分と供給量を均衡させるにはケインズ理論では不十分である。ケインズは支払い手段の欠如によって一時的に需要を失う市場のために、予め相応の供給量を想定した。この（需要なしの供給）ケースに対するケインズの解答は、潜在的需要とその市場を実現させることにある。しかしながら、貧民たちの必需品まで供給が及ばないことから一度も創設されたことがない潜在的市場などは給空事であって、雇用と供給の創出によって対処

できる類のものではない。この（供給なしの需要）場合は、貧しい市場の支払いに関する限り、供給こそが実効化されるべき眼目に他ならない。

奢侈品の販売を促進しようとしても、国内市場に販路はない。インディオたちを変貌させ、車を購入し、高等教育を受け、精神分析医に掛かるような中間層に育て上げるなど現実を無視した夢物語で、それは供給量を変える代わりに供給品を購入できるように顧客を造り替えるようなものだ。奢侈品をもっと販売しようとするのであれば、外国市場を目指すしかない。個人向けの高価なサービスには外から顧客を呼び込むべきで、それはインディオたちを観光客や患者、学生にするよりもずっと簡単だ。同様に彼らをドライバーにするよりも車を輸出する方がはるかに楽だし、貧困国にあっても豊かな都市間で統合する方が国内市場を統合させるよりも容易である。適切な供給が行われない結果、国内市場が二つの分野でブロックされている。それは需要の欠如により奢侈品の市場が育たないこと、そして供給の欠如により日用雑貨市場も成長しないことだ。

仮に支払い手段があったとしても、価格・場所・時期・実情を無視した供給が固有の需要を創出することはない。不足分を充当させるためだけならば、（益・無益、適・不適、時期、満足度を度外視して）同じ雇用量とグローバルな供給により生産は可能である。しかし、雇用を創出して需要を拡大し、支払金を捻出するという従来やり方は機能してこなかったし、現在も機能していない。理由は、貧しい住民が必要としていない生産物のために彼らに雇用を与えることは、ありもしないものを買求める金を与えるに等しいからで、市場の均衡を崩してインフレを招くことになるだろう。疎外されている住民に対しては、彼ら自身の能力に見合った形で必要性に応じていかねばならない。一人の農民を農作物取引の破綻者に仕立て上げるために必要な投資の原理は、（供給は増えないが食料や衣類の需要は確実に増加する）隷属的職業に出合う大都会で、必要な都市型投資が高くつくばかりで有効に働かないことと同じである。どちらのケースも、多くの場合、必要以上の投資が

なされている。地方で暮らしていくには、ほどほどの菜園とミシンがあればこと足りるし、途方もない事業や不経済な都市行政など必要ないのだ。

現金による分配

現状の発展的供給の背後にある政治経済力は、行政・公共・民間・国家間・組合・大学が構成する巨大ピラミッドによって組織化されていて、その類似性や共通の利益は相互に牽制しあっているうちは顕著に現れない。しかしピラミッド化から外れた住民たちの耐乏生活をみれば、それは誰の目にも明らかである。中央政府・強力な組合・国内外の巨大企業・著名な教育機関の目指すところは一致している。つまりピラミッド外の地方行政・小企業・自営労働者・末端の研究や学習が相応に発展する機会を遮断しているのだ。

このような横暴がまかり通るのはピラミッド内共通の価値、つまり最大資源（主として一人当たりの平均生産量を上げる付加価値）、もしくは（単一機関が提供できる資材・人材の増強による）最大値引き率を駆使した彼らの「生産性」向上によるものだ。それはピラミッド化した産業部門間の対立を溶解させ、同時に公務員・民間社員、組合員・学術関係者のために、より多くの利権・給料・臨時手当・奢侈品を分配させることになる。これを文化的かつ政治的に表現することも可能だ。ピラミッドは目に見える頂点を持っている。その頂に立てば相手を統治翻弄するばかりでなく自己のプライドを満たすこともできる。平たく言えば、人生の成功モデルとなり、国家建設に邁進する躍動感を共有できるのだ。底辺にたどり着き、これから登ろうとする人々を政治的に支える進歩主義幻想の頂点であろう。

進歩主義思想はピラミッドの同一階層内の平等には幸いするが、全体的に見れば不平等を強調することになる。頂点には達していない人々（最上層3%に次ぐ30%）も十分に威圧力は有しているが、満足感にはほど遠い。彼らは扱いに不満を感じたときは一時的に下層の人々と同調し、平等権については上層部寄りになる。ピラミッド構造内に位置を占めた特権者たち（突出

した特権者ではない)の上昇志向は下層者たちに(車・病院・高等教育などの)特権を普及させていく力になるだろう。それは上部であると同時に下部でもある少数の「多数者たち」の「大衆的」需要を満足させる一つの形である。このことは国民の三分の一が感じている内部的不平等感を減じるが、ピラミッド外の住民にとっての不平等感は助長されていくばかりだ。

現状に抗い上昇志向を持つ住人たちは、抵抗の力となる文化的基盤を失い、自力で豊かさを獲得する選択肢を見いだせずにいる。ピラミッド化された産業部門は辺境に点在する小規模生産に適した生産手段を提供しない。それどころか反対に工場での従属労働の対価を小規模生産物以上に支払っているのだ。巨大化していく企業・組合・行政・大学は生産手段の集中化と個人的なピラミッド化によって維持され、小規模生産者を根絶やしにして彼らを賃金労働者に変えていく。ピラミッド構造は重大な負の経済の危険を孕んでいる。その産業部門は小規模生産者よりも高コストの生産手段を用いるため、全体として資本単位ではより低生産になっている。一人当たりの生産性は小規模生産者を上回っているが、それが積み重なると一人当たりの生産手段は浪費の域に達してくる。かたや小規模生産者は乏しいながら固有の資金から少しでも多くの利益を上げようとする(結果、ピラミッド型産業部門を打破しかねない利率の支払いが可能となる)。とは言え、彼らは生産手段を一定以上提供できないため、一人当たり生産性が上昇することはない。この状況下では、近代市場が従属労働、つまり雇用と引き換えに彼らに提供できる唯一の生産手段が高価で手の届かないものであるならば、それは却って幸いかもしれない。しかし、ピラミッド型の従属市場で政治的に競合しながら階段を上っていくことは、吹きさらしの野外市場で張り合っていくよりも値打ちがあるだろう。

真の敗者は、従属を売ることすらできず、ましてや生産性向上のための安価な手段も購入できない人々である。角錐形のピラミッドは下に行くほど収益を失い、彼らを吸収することができない。しかも売買では搾取が付きもの

であることに加えて、発展の旗印（衛生条令・社会保険・事業税・あらゆる許可証）による近代サービスの経費が彼らを押し潰していく。ところがピラミッド化した近視眼的なセクターは、他のセクターに巨大な損失を与えていながら、それによって同等の利益に与ることはない。結果的に双方の市場の成長と生産性向上に歯止めをかけるだけだ。搾取による利益など（国内市場の）ブロック化の弊害からすれば実に微々たるものである。ブロック化はピラミッド構造内のセクターの相互的な関係を切断し、自力発展の妥当な手段さえも奪っていく。

最下層の住民に対する小手先の現物支給型支援も（ピラミッドモデルへのアプローチを除いて）彼らには届いていないし、生活必需品にも対応してはいない。支援の内容は都市の中間層、特に大学生に対する制度的かつ形式的な雇用であるが、これはサービス販売の推進のために国家的諸問題からさらに多くの利益をかすめ取ることに他ならない（因みに、本書のようなクリティック業も同罪である）。

進歩主義政策の推進 20~30 年後に見るジニ係数の悪化は次のように説明されている。税金が上がれば不平等感が高まるが、それは税金の行き先が貧困層ではなくピラミッドセクターの住民たち（公務員・会社員・請負業者・納入業者・大学関係者）であって、彼らが一般的ではないモデルの満足度を得るために心血を注いでいるためである、と。あらゆる優遇措置を講じながら「上に向かって」平等化を図るのは、（本来、優遇措置は全員を対象にしたものではないことを思えば）決して無知やポピュリズムによるものではない。とは言え、それは満足度よりも必要度を満たすという発展の概念に著しく逆行していると言えよう。つまり常により多くの交通サービス業、医療施設、教育機関、コーディネート業等が優先され、常に不十分かつ高価で満足度の低い結果を生み、全体的に見れば近代サービスの恩恵から遠ざかっていくのだ。

上部階層への移行願望に終わりではなく、地理的・社会的に同時進行のイン

フレを誘発していくことになる。そして、それが（ドン・フアンの処世術のような）乱暴なサービス業に代わって（フロイトの教育のような）近代サービス業が登場すると「同一のもの」が高騰していくのだ。（財源が許す限り）現物支給や無料サービス、補助金を出せば近代セクターにがんじがらめにされている国内市場の役に立ち、ピラミッドモデルへの接近を試みる下層の住民に慈雨となるだろう（特に彼らをビジネスの対象としている都市住民にとっては）。しかしながら、真の受益者以外には惨憺たる結果をもたらすだろう。クーポン券による分配の方がはるかにましかもしれない。インフレ傾向の中で都会の下層民が受け取る1ペソの満足度は、田舎暮らしの1ペソには及ばないからだ。

天井知らずのインフレが税金のおかげで貧困層に恩恵を与えるなどという説を真に受けてはならない。われわれが富の分配方法を改めて考えてみようとするのであれば、今こそ、その時である。例えば、不可分所得の何パーセントかを天引きし、それを、ただ単にそうすべきものとして全市民に均等に分配してはどうだろう。

この再分配がインフレを助長しないようにするためには、生産性を向上させ、上意下達のピラミッド構造から離れて住民の消費を安価な方法で創生していく必要がある。そうすれば国内市場を刺激し、生産性と消費という2つのセクターを結びつけるシステムが生まれ、それが現金の流れによって勢いを持つことになるだろう。

だが、こうしたことを政権の外で提案しても結局は夢想に過ぎないではないか？ 当然だ。歳入の100パーセントを均等に現金で再分配するとしたら、それはまさしく架空のリバタリアン共産主義のようなものだろう。そうではなく私が考えているのは、もっと僅かなパーセンテージで、基本的に平均しても最低限の収入に達するかどうか程度の額である。いずれにしても中央の政治的な決断が必要で、それは不可能ではあるまい。他方、より有用な供給の促進は、これも同じく政策決定を待つことになるが、具体面では多数の有

志たち、ボランティア団体、中・大企業、内外の機関の手に届くところにある。より有用な供給を産み出す、経費以上のものを生産する、それを成すのは政治のリアリズムである。これで最後とするが、安価な生産方法もあれば、奢侈品や高価なサービスを提供するやりかたもある。後者で人は金を儲け、昇進し、支配力を身につけ、そして腐敗していく。

《訳註》

- 1) 底本：Gabriel Zaid, *El progreso improductivo*, Random House Mondadori, México, 2009.
- 2) 本稿の原文には「ピラミッド」に関連するあらゆる品詞が登場している。名詞 *la pirámide*, *la piramidación*；動詞 *piramidar*；形容詞・副詞 *piramidal* (*mente*), *piramidado/a*。スペインで出版されている5万語程度の見出し語の辞典では *la pirámide*, *piramidal* しか収録されていない。見出し語数約7万語の『ラールス・スペイン語大辞典』(*Gran diccionario de la LENGUA ESPAÑOLA, LAROUSSE*, Barcelona, 2007) で初めて *piramidado/a* が登場する。メキシコスペイン語の面目躍如たるこれらの用語についてオクタビオ・パスは「ピラミッドの批判」の中で次のように述べている。まずメキシコの地形的特質として、2つの大洋に挟まれて突端を切り落とした巨大な逆さピラミッドを彷彿させること。次に古代メキシコ文明の投影である。つまりピラミッドの四側面は四つの基本方位であり、各階段は階級を示し、最上階の踊り場は太陽と星辰の御座である。古代の神々の創造的破壊、他者を支配する政治は冷酷な階級社会という形態で今日まで引き継がれて来た。そして発展と発展途上の二つのメキシコの中で、まだわれわれは実現可能な発展のモデルを創り出していない、と結んでいる(オクタビオ・パス『孤独の迷宮』法政大学出版局、2007年、pp.271-303)。
- 3) メキシコの労働組合事情は特殊で、最大政党である「制度的革命党(PRI)」は労働組合を政党組織に取り込むことで安定政権を築いてきた。つまりメキシコの労働組合は体制側勢力である。
- 4) 「概論」の部分は雑誌に発表されたコラムを単行本として出版するに際して、本論の前段階として読者のために加筆されたものである。

著者のガブリエル・サイド(Gabriel Zaid, 1934-)はメキシコのモンテレイ(Monterrey)出身の詩人、エッセイスト、社会評論家。本書はオクタビオ・パスの『ブエルト(Vuelta)』誌に「メビウスの輪(Cinta de Moebio)」のコラムで発表された記事を収録出版(1979年)した作品である。彼の著作の中で最も読み継

がれている作品で、人々が進歩發展と考える動向を批判し、メキシコ特有の政治構造の中で貧しい人々のための実現可能なプロジェクトを模索している。

翻訳に当たり著者の許可を得るために阿波弓夫氏にご尽力頂きました。その他の助言も含めて、この場をお借りして御礼申し上げます。

(たかはし・さよ 商学部特任教授)